



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	WeibとFrau
Author(s)	塩谷, 饒
Citation	独語独文学科研究年報, 6, 1-8
Issue Date	1980-05
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/25549
Type	departmental bulletin paper
File Information	6_P1-8.pdf



Weib と Frau

塩 谷 饒

0. 女性を表わす語彙は多くの言語において広い範囲の語野を形成している。つまり、地域により、家庭や社会における身分や職能により、年齢や男性との関係により、あるいは話者の情緒により、さまざまな言い方をされている。そして、あるものは時代とともに消え、新しく加わるものもあり、昔から伝わったもので意味や適用範囲の変動を起したものもある。

同じことを言い表わしているようでも、「おんな(女)」、「女子」、「女性」にはニュアンスの差があり、「おんな」は古くから伝わる大和言葉で、しかももっとも広い範囲で使われているのに対し、「女子」は儒学によって伝えられたものであるから教育など固い意味の語と結びやすく、女性は文明開化以後現われた語彙で客観的な表現に使われる傾向がある。女性関係、女性ホルモンなど。

また社会における職能・権利を対男性との意識において使うときは、多く「婦人」という表現をとっている：婦人問題、婦人運動、婦人警察官など。

またひとしく妻を表わすと言っても、「家内」「女房」「うちのかみちゃん」などには話者の心的態度の差が反映されているし、生活の実態と法的身分のちがいから「本妻」「内妻」「二号」などの区別が行われている。さらに、現在では他人の妻を呼ぶときに「奥さん」が一般的であるが、これはもともと武家言葉の奥方、奥様に由来する語であったから、商家では使われなかったのである。

いわゆる昭和一けたの世代までは、都市の下町では「お上(かみ)さん」という語で呼ばれていることを耳にして育ったはずである。

1.0. ドイツ語においても、これに類することが認められる。現代語では、Frauが女性一般および妻に対して用いられているが、その古い形vroweを示したMhd.では、身分の高い人(とくに騎士)の夫人を指す語であった。当時の女性一般、また妻を表わす語はwip(現在のWeib)であったのである。これらの意味は、それぞれ音韻変化を経てFrau, WeibとなったFrühneuhochdeutschでも保たれていた。だしかに騎士階級は没落したが、代って官僚組織を整備した領邦が形成され、その君主を頂点とする身分のヒエラルヒーは厳として存在していたから、Frauなる語はやはり高貴な身分の——上流階級の——夫人を表わす語として使用された。

1.1. ルターの聖書(1522年—1546年)においても、このことが反映されている。

列王紀上(11, 3)には、ソロモン王には「王妃としての妻七百人、そばめ三百人があった」と記

されているが、ルターはこの場合の妻をFrauと訳している。また、はしため（侍女、女奴隷）に対する女主人のことも同様にFrauと訳している。（創世記16, 4・8・9ほか）さらに、列王紀下(4, 8)には「ひとりの裕福な婦人」とあるが、これに対してはeine reiche Frauを当てている。富の豊かさは地位の高さと切りはなせぬ時代の記事である。同じように、イスラエルの町を救った賢い女（サムエル記下20, 16）のことも、eine weise Frauと言いつわされているが、これは心の気高さのゆえに一般女性Weibと異なる語を必要としたと考えてよい。

1.2. ルター聖書は、18世紀のはじめから当世語法を指向した分りやすい改訳を経たが、一方ではルターのスタイルをできるだけ残しておきたいという要請もあり、最近の改訂（新約1956年、旧約1964年）までなかなか変更されなかった古い語法がいくつかあった。女性に関する語野に含まれる表現もその例である。しかしながら、今日では特殊の場合にしか使用されなくなったWeibが、多くの箇所ではFrauと改められたのは当然であろう。すなわち、ルターは新約聖書において、ギリシア語のgynē（女・妻）をWeibと訳しているが、新しい版では全体の3分の2（198回のうち135回）がFrauに代えられた。Weibがそのまま残されている場合には、それなりの理由があることがある。たとえば、男と女という語が対で用いられているとき——とくに旧約の創造の故事に関して——にそれが見られる。

Denn der Mann ist nicht vom Weibe, sondern das Weib ist vom Manne.

なぜなら、男が女から出たのではなく、女が男から出たのだからである。（コリント人への第一の手紙 11, 8その他）

また、イエスが権威をもって特定の女に対して「女よ」と呼びかけているときもWeibが使われている。

Weib, wo sind sie, deine Verkläger? Hat dich niemand verdammt?

女よ、みんなはどこにいるか。あなたを罰するものはなかったか。（ヨハネ8, 10ほか）

ここで機械的にFrauを当てることは不自然である。なぜなら、現代のドイツ語標準語ではこういう呼びかけが存在しないからである。¹⁾

さらに、Weibの保存が聖書の各書の文学的なジャンルによると思われる場合もある。たとえば、黙示録の中では原文に現れた14回中12回にわたってWeibが新版で使われている。それは、この書物がイエスの伝記や使徒の書翰のように、直接の生活環境を背景としているものでなく、幻想的なポエジーの形をとった啓示として伝えられているため、翻訳としてもまったくの日常語と距離のあ

る文体が要求されるためであろう。

Und es erschien ein großes Zeichen am Himmel : ein Weib, mit der Sonne bekleidet, und der Mond unter ihren Füßen und auf ihrem Haupt eine Krone von zwölf Sternen.

また、大いなるしるしが天に現われた。ひとりの女が太陽を着て、足の下に月を踏み、その頭に十二の星の冠をかぶっていた。(ヨハネの黙示録12,1)

次の文の中では、サマリアの女に対して Frau と Weib が使い分けられている。(ルターの原文ではともに Weib)

Spricht nun die samaritanische Frau zu ihm: Wie bittest du von mir zu trinken, der du ein Jude ist, und ich ein samaritanisch Weib ?

すると、サマリアの女はイエスに言った、「あなたはユダヤ人でありながら、どうしてサマリアの女のわたしに、飲ませてくれとおっしゃるのですか」。(ヨハネ4,9)

つまり、はじめの Frau は客観的な叙述であるのに対し、自らサマリア人と名のった女の言には、ふつうのユダヤ人に相手にされない種族の卑下が反映されているので、ここでは Weib という表現が効果的である。しかし、時には Frau-Weib が別に意味もなく使い分けられた場合もある。マタイ(15,22)に出て来るカナンの女には Weib が残されているのに対し、マルコ(7,26)のギリシャの女は Frau と改められている。

そのほかにもいくつか例があるが、現代語訳の分担者それぞれの語感によるのか、あるいは Frau への統一が忘れられたか、にわかに判定しがたいところである。いずれにせよ、聖書の性質上そこに Weib を残しておいて違和感がおきないことは、言語使用レベルの問題として興味ある事実と言える。

1.3. 旧約聖書では、Ehe を規定語とし、Weib あるいは Frau を基語とした複合語がつぎのように使われている。

...sie ist eines Mannes Ehe Weib.

彼女は夫のある身である。(創世記20,3)

Wer eine Ehefrau findet, der findet etwas Gutes...

妻を得る者は、良き物を得る。(箴言18,22)

最新の改訳では Ehefrau に統一された。

これに対して、ホセア書(1,2)におけるきびしい表現 Hurenweib (淫行の妻) は改訳でもそのままになっている。

1.4. Weib の縮小名詞はルターでは weiblín であったが、後の版では音韻変化を経た形 Weib-lein と改められ、最近の改訳まで保たれて来た。それには二つの意味がある。すなわち、動物の雌(雄は menlín → Männlein)であり、——創世記 6・7 章——もう一つは、蔑意を含む縮小名詞の用法であって「愚かな女」を指している。新しい訳では雌は現代語法に従って Weibchen と改められたが、後者は die losen Weiber と意訳された。

ところで、ルターが使用した Frau は、「裕福な女」「賢い女」の場合はそのまま残ったが、明かに身分の高さが認められるときには、Herrin (創世記 16,4 ほか) や Fürstin (士師記 5,29) と改められた。上に引用したソロモン王の「王妃としての妻七百人、そばめ三百人」という箇所は、原文では Frau(en) と Keksweib(er) が当てられていた。しかし、後者が現代語で通用しなくなったため、Nebenfrau がこれに代った。一方もとの Frau(en) に対して Hauptfrau(en) と置いたが、それは上手な訳とは言えない。なぜなら、Hauptfrau という語は現代ドイツ語に定着していないからである。むしろ、Schlachter 訳(1911年) Herder-Büchereiの方が無理がないと言えよう。

2.1. 少女やそれと同義語の娘を表わす語としては、今日のドイツ標準語では Mädchen がふつうに用いられている。ルター訳聖書では dirne, meidlín (後の Mägdlein)、の2語が存在する。Dirne は今日では売春婦を指すようになったから、オーストリアやバイエルンの一部ではその同系語の Dirnd(e)l が女の子を表わす語として用いられているために、違和感を持たない層があるにせよ、標準文語を基調とする聖書からは早晚追放さるべき運命にあったろう。この語はルター訳ではもっぱら旧約に現われ、その例は 4 回見出される。改訳ではその 3 分の 2 が Mädchen と改められた。3 分の 1 は文脈によって別な語で訳し分けられている。次の例の日本語訳は口語訳の対応箇所における表現である。

Jungfrau (おとめ。列王紀上 1,2 ほか)、junge Frau (若い女。ルツ記 4,12)、Magd (はしため。箴言 9,3 ほか)、Dienerin (侍女。エステル記 4,4 ほか)

2.2. meidlín (後の Mägdlein) は、旧約に 4 回、新約に 7 回使われている。ルターは縮小詞としてほとんどの場合 -lín を使っているが、これは彼が育った中部(一時は低地)ドイツ語のものでなく、上部ドイツ語の形を受け入れたものである。それを受けついだ Nhd. の -lein は日常語のレゲルにおける上部諸方言のなまの形ではなく、²⁾ いわゆる gehobene Sprache という次元にお

いて用いられるものである。したがってながらく聖書に保存されて来たのであった。新版では新旧約 11 回のうち 8 回は Mädchen と改められた。マタイ・マルコ両福音書で 3 回にわたり Mägdlein が見られるが、そのうち 2 回は、イエスの荘重な発言を表わす文体論的な要求にもとづくものと考えられる。

Mägdlein, ich sage dir, stehe auf! Und alsbald stand das Mädchen auf und ging umher; es war aber zwölf Jahre alt.

少女よ、さあ起きなさい… すると少女はすぐに起き上って歩き出した。(マルコ 5, 41-42)

マタイ伝ではイエスの Mägdlein に続き、客観的な記述としての主語「少女」もやはり Mägdlein となっているが、それは前者につられてしまったのか、その部分の翻訳担当者の語感によるのか、何れかであろう。

なお、ゼカリヤ書(8,5)の Meidlin は後に Mägdlein となって保たれて来たが、ほかの例に先んじすでに 1937 年版で Mädchen に改められた。これは Mädchen の使用が 18 世紀以来定着していたのだから、当然起りうるケースである。³⁾

「処女」という意味での Jungfrau はルターの原典以来そのまま保たれている。ただし、ルターはこれも広い意味にとり、童貞である男の場合にも使った箇所がある。(黙示録 14, 4)

これは次に示すように最近の改訳まで保たれて来たのであったが、ついに名詞そのものでなく形容詞に代わられた。

Diese sind's, die mit Weibern nicht befleckt sind-denn sie sind Jungfrauen. — 新しい訳: Diese sind's, die sich mit Frauen nicht befleckt haben, denn sie sind jungfräulich...

彼らは、女にふれたことのない者である。彼らは純潔な者である。

3.1. 主人をもつ身分の女性である Magd はルターの原典で約 70 箇所に出ている。これは日本語訳では「つかえめ」(創世記 16, 1 ほか)、「侍女」(出エジプト記 2, 5 ほか)、「はしため」(ルツ記 3, 9 ほか)、「女奴隸」(ガラテヤ書 4, 22 ほか)等の表わし方をされているが、現代ドイツ語訳でも原文のとおりとなっている。日本語で「はしため」という語が当てられている箇所は、必ずしも現実の身分としての Magd でなく、他人の前で自己を卑下して述べるときに使われている。

また、神に仕えるものというたとえでルターは Dienerin を使っているが——邦訳では女性形でな

く「神の僕」となっている——これも現代訳で訂正されていない。なお上にも触れたように、原文で Dirne であった箇所が Dienerin と訳し直された場合がある。

3.2. 「売春婦」を意味する Hure は原文に 33 回現われ、それがそのまま改訳以前まで続いてきた。日本語訳では、多くの場合に「遊女」と訳されており、職業やそのたとえでなく実体を指して罵る語として「淫婦」（黙示録）「淫行の女」（ホセア書）が使われている。最初のルターによる聖書でその大部分の箇所 Hure を残しているが、箴言で fremde Frau (5, 3) と unzüchtige Weiber という表現が見られる。ここでは Weib はすでに軽蔑的な意味で使われている。そのほかルカ伝で Dirne (15, 30)、さらに申命記 (28, 18) ではいっそう内容をはっきりさせて Tempel - dirne と改めている。

4.1. ルターの原文に存在し、19 世紀の終り近くまで残されて来たもので、20 世紀はじめの改訳で姿を消した語もある。民数記 (31, 18) に「まだ男と寝ず、男を知らない娘」という記事があるが、ルターは Aber aller Kinder die Weibsbild sind vnd nicht Menner erkand noch beygelegen haben と訳している。この箇所は 1885 年の版でも Aber alle Kinder, die Weibsbilder sind…となっていたが、1937 年版では一挙に alle Mädchen と改められ、その後また alle Kinder, die weiblich sind…と変更された。最新版では alle Mädchen, die unberührt sind という簡潔な表現となっている。現在 Weibsbild は卑俗な発言における「めす」に相当し、ふつうの文章では使われない。

また、創世記 (1, 27) には、神は人を男と女に創造した記事があるが、ルターは男と女を Menlin vnd Frewlin と訳している。これは後に音韻変化を経、正書法の規則に従い Männlein und Fräulein という形となって 19 世紀末まで及んだ。(1885 年版ではそうになっている。) ところが、一方この頃から未婚女性を表わす語として Fräulein が標準語に定着したため、20 世紀はじめの改訂では姿を消し、ただの Mann und Frau になったわけである。

4.2. 他方では、現在一般に使われなくなった語であって現在まで保たれているものもある。すなわち、創世記の「男から取ったものだから、女と名づけよう」という記事において、ルターは女を mennin = Männin と訳した。これは男から女が取られたという意味とヘブル語の語呂合わせ⁴⁾を巧みに写し出した表現であった。現在では Männin は「男のような女」の意味に使われているが、ドイツ語の聖書はいずれの訳もこれを探っているのである。

また、マタイ伝 1 章に「ダビデの子ヨセフよ、必配しないでマリヤを妻として迎えるがよい。」という文がある (20 節) が、ルターは Jose du son Daid/fürchte dich nicht/Mariam dein gemalh zu dir zu nemen と翻訳した。妻 gemalh は後の Gemahl であるが、この形となってから意味は変って主人 (今では雅語) を意味することになったにもかかわらず、現行訳に

も残されている。この発言は天使の重大なお告げというわくでなされているため、日常語のレベルを超えた表現となっているのかも知れない。

5.0. 以上において、「女」に関する語野の変動をルター聖書と改訂版によって概観して見た。言語の推移が大きく認められているからには、原文を改めて現代語への適用を図らないわけには行かなくなった事情が察せられたことと思う。今回の改訂は前回までのどの場合よりも大規模なものであったが、部分的にはこれに先んじた場合もあり（上述の Mädchen）、また今回の改訂で変更が期待されそうなところで、古い用法が残されてた箇所もある。（Weib や Mägdlein のように）それは必ずしも改訂が不徹底であるためと決めつけられないのであって、その理由を考えて見る価値がある。音韻・形態・文構造において均齊のとれた現代語でも、語彙となれば、新旧の世代でそれを使う意識にへだたりのあることは周知の事実である。聖書のごとき諸種の文体を含む複雑な文献にあっては、同じ概念が時間的にはばのある表現によって示されることを拒み切れないと言えよう。たとえば、現代語に適応するといっても、今日ふつうに使われる Dame を採り入れることはやはりそぐはないのである。⁵⁾

（注）

1) ルターによる訳よりも現代語化が進んでいると思われる Züricher Bibel（1931年に改訂完成）でも、この箇所は Weib を使用している。Herder-Bücherei では Frau, wo sind sie? という訳であるが、この Frau はやや機械的な適用である。また、聖書を現代ドイツ語で表わすことに専念した Gute Nachricht erklärt の訳者は Weib-Frau を除いて単に《Wo sind sie geblieben?》と表現している。

2) たとえば、上部ドイツ語を舞台とする文学作品では Mädel の方がふつうに用いられる形である。これらの地方でも実際の方言のレベルでは、さらに色々な形が見出される。

3) ルターは、家庭では Mädchen を使う機会が多かったという推察が、Tischreden の記録から察せられる。

4) ヘブル語では男は ish、女は isshah である。ドイツ語のみならずゲルマン語訳ではみな Männin に当る語を使用している。英語でも man からつくられたから woman という表現で一応かっこうをつけているが、日本語訳では、そのまま読んでも実感が湧かないと言えよう。

5) 現代ドイツ語では、未婚既婚を問わず成年に達した女性の呼びかけに Frau を用いる傾向がある。北大の最近の外人教師諸君はみなそういう。しかし、人によっては——あまり年配でない世代でも——Fräulein という呼び方も続けている。私には若い法律家にそのような知人がいる。

補説：女が規定語や修飾語となって他の名詞に伴う場合や、また他の語（群）の修飾を受けるときは、ルターにおいて Frau が使われている。これは、そういう表現がもともと身分のある人々を扱ったときのみ書き言葉に残されたからであろう。しかもそれらは女性全体に通ずることなのだから、新版においてもそのまま Frau にしておいて差支えなかったのである。次にルター以来つづいて来た例を——現代語つづりで——あげて見よう。（ ）内に邦訳と、ドイツ語聖書の最新版で字句の変ったものを書き添えておく。

Frauenschmücken（婦人の化粧に使う品。 エステル記 2, 12 ）

Frauenliebe（女の愛。 サムエル記下 1, 26 ）

Frauenhaus（婦人の居室。 エステル記 2, 13・14 ）

nach der Frauen Weise（女の常のこと。 創世記 31, 35 ：次の例の場合と同じだが、婉曲に言い表わしたもの）

bei der Frau in ihrer Krankheit（汚れのときにある女。 エゼキエル 18, 6 ）

bei einer Frau in ihrer Unreinheit）

wie einer Frau Herz in Kindsnöten（子を産む女の心のように。 エレミヤ 48, 41; 49, 22・24; 50, 43 ）

これら例のうち、最初のは最新版で大きく書き改められ und was sonst zur weiblichen Pflege gehört となっている。

ルターの原文ではダニエル書 11, 37 に Frauenliebe が使われている。改革者の記した注によれば「女への愛」という意味であったことが分る。しかし、本来は誤解であったので、最新版では原意に添って Lieblingsgott der Frauen と改められた。

（文学部教授）